



1. 調査報告

「聚楽第跡の調査」

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 係長 岩松 保 P 1 ～ P10

2. 講演

「聚楽第にみる秀吉の城造りと町造り」

同志社大学文化情報学部 教授 鋤柄俊夫 P11 ～ P19

日時：平成 25 年 8 月 24 日（土） 午後 1 時 30 分～ 4 時 00 分

場所：向日市民会館 4 階 第 1 会議室

主催：京都府教育委員会

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援：向日市教育委員会

聚楽第跡の調査

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

係長 岩松 保

1. はじめに

今回報告するのは、西陣待機宿舎の建て替えに伴って実施した聚楽第跡の調査成果で、京都府警察本部の依頼により実施しました。現地調査期間は平成24年5月25日～12月27日で、調査面積は1,330㎡です。調査地は京都市上京区上長者町通裏門東入須浜町にあり、平安京の条坊復原では平安宮の北東部、「梨本」と記されたか所にあたり、安土桃山時代の聚楽第があった場所にあたります（第1図）。

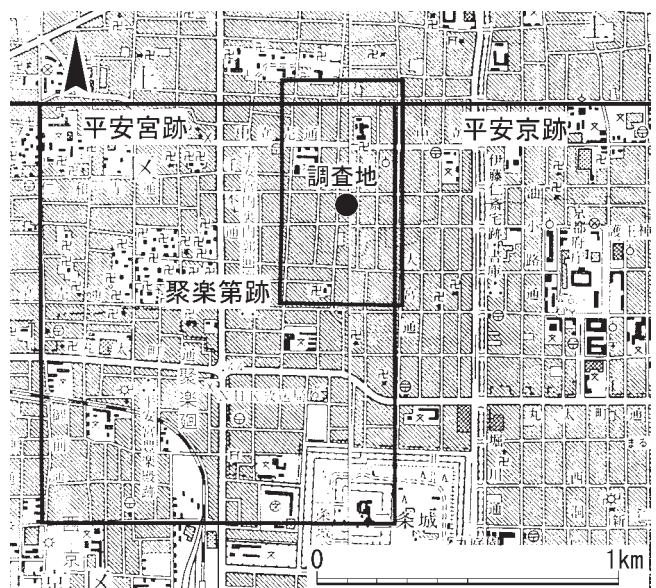
平安宮の梨本院についてはよくわかっていません。天長9（832）年、内裏修造の折、淳和天皇が梨本院を訪ねたり、『文徳天皇実録』に「先代別館」と記されており、仁明天皇の別宮となっています。また、仁壽3（853）年から翌年にかけて、文徳天皇の住まいとなっています。

一方、聚楽第は関白豊臣秀吉が京都の公邸として構えた邸宅・城郭として広く知られています。今回の調査地は、聚楽第の先行研究によると、本丸南辺付近にあたり、本丸を囲う堀が位置していると推定されました。

2. 秀吉の年譜

まず、秀吉及び聚楽第に関する歴史を振り返っておきます。

天正10（1582）年に上洛中の織田信長が明智光秀に本能寺で討たれます。その時、備中高松城で毛利氏を攻めていた羽柴秀吉は速やかに和睦を結んで京に戻り、山崎の合戦で光秀を倒しました。この後、織田家の後継者と遺領の配分を決定するために、愛知県清洲城で会議が行われました。



第1図 調査地位置図

付表 秀吉及び聚楽第関係年表(本能寺の変以後)

1582年	天正10	本能寺の変で織田信長倒れる 山崎の合戦で明智光秀を破る 清洲会議で柴田勝家と対立 山崎城を築城
1583年	天正11	賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を破る 大坂城の造営・妙顕寺城の造営
1584年	天正12	小牧・長久手で家康と戦う
1585年	天正13	関白となる
1586年	天正14	政庁兼邸宅として聚楽第造営に着工
1587年	天正15	九州平定 聚楽第完成
1588年	天正16	聚楽第に後陽成天皇をお迎えし、徳川家康ら有力大名に忠誠を誓わす
1590年	天正18	関東、奥羽を平定。天下統一
1591年	天正19	肥前名護屋城の造営 関白職・聚楽第を甥秀次に譲る
1592年	天正20	朝鮮出兵(文禄の役) 隠居屋敷として伏見城を造る(指月城)
1593年	文禄2	秀頼、大坂城で生まれる 明との講和交渉のため、伏見城を大規模に改修
1594年	文禄3	伏見城下の整備
1595年	文禄4	秀次を和歌山県の高野山に追放・切腹。 聚楽第を徹底的に破却(伏見城などへ)
1596年	文禄5	伏見地震 伏見城再建に着手(木幡城)
1598年	慶長3	朝鮮出兵(慶長の役) 秀吉、伏見城にて薨去

天正13(1585)年、秀吉は関白に就任したことから、京都での政庁・居城として、^{だいだいり}大内裏の故地である「内野の地」に聚楽第を造営します。聚楽第は、関白秀吉の権威を誇示する豪華絢爛な城郭で、^{しょこう}諸侯に建築用材を課して造営され、天正15年に完成しました。

天正16(1588)年4月には後陽成天皇を聚楽第にお迎えし、秀吉は傘下の諸大名・武将に朝廷への尊崇を尽くすべき旨を諭しつつ、秀吉自身に臣従することを後陽成天皇の前で誓わせました。聚楽第の近隣には^{だみょうやしきがい}大名屋敷街が整備され、天正19(1591)年には^{おどい}御土居の造営が開始されます。

天正15(1587)年には九州の島津氏、天正18(1590)年に奥州の伊達氏、関東の後北条氏が秀吉の軍門に下り、ここに秀吉による天下統一が達成します。

天正19(1591)年8月、明を攻略するための前線基地として^{なごやじょう}肥前名護屋城を^{てんかふしん}天下普請により築城にかかります。同年12月に、秀吉は養子の秀次に関白の地位と聚楽第を譲りますが、文禄2(1593)年に側室の淀殿が秀頼をもうけると、秀吉と秀次の関係が悪化していきます。文禄4(1595)年7月、秀次は謀反の疑いをかけられて聚楽第を退去させられ、^{こうやさん}高野山で切腹を命じられます。翌月には秀吉の命により、「一字も残さず、基礎にいたる

(^{きよすかいぎ}清洲会議)。この会議の席で、織田家の後継者を巡って、秀吉と柴田勝家が対立しました。その結果、織田家重臣の筆頭であった勝家の発言力が弱まり、代わりに秀吉が重臣筆頭の地位を占めるようになりました。この後、秀吉は領国の播磨国と都を結ぶ要地としての大山崎の地に城を築きました。

天正11(1583)年、秀吉は勝家を^{しずがたけ}滋賀県賤ヶ岳の戦いで破り、信長の後継者の地位を確かなものとします。また、^{いしやまほんがんじ}石山本願寺の跡地で^{おおさかじょう}大坂城の造営に着手し、大坂での地盤を固めます。

天正12(1584)年、秀吉は愛知県で織田信雄・徳川家康と戦いました(^{こまき}小牧・^{ながくて}長久手の戦い)が、間もなく戦は膠着状態となり、和睦が結ばれませんでした。

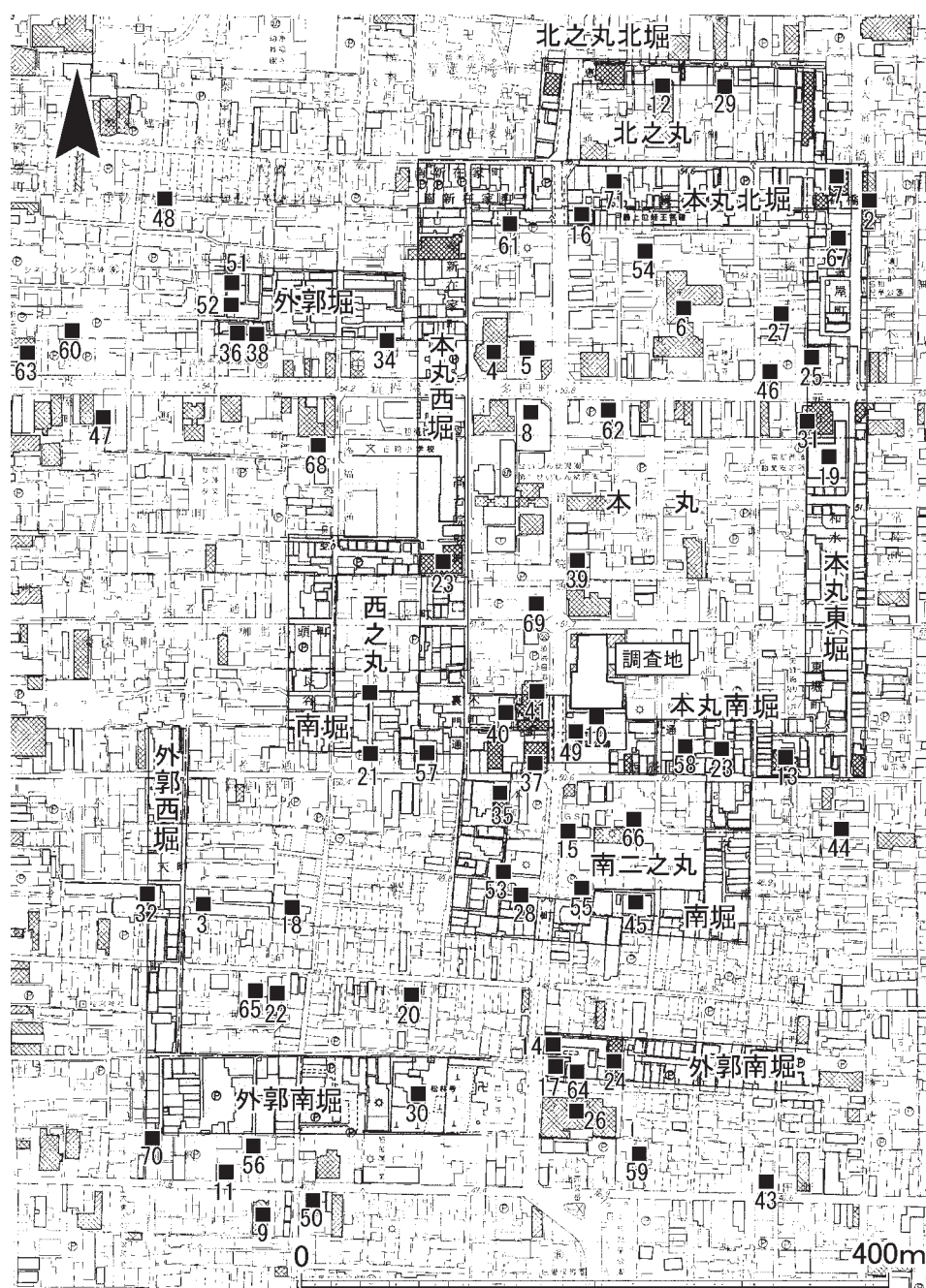
まで悉く毀たしめ」(ジャン・クラセ『日本西教史』)とあるように、聚楽第は徹底的に破壊され、建物の多くは伏見城や各寺院に移されました。

破却後の聚楽第跡は短期間で空き地となり、寛永年間の後半になると居住が許され民家が建ち並ぶようになります。現在においても街中に凹みが観察され、聚楽第の堀跡の遺構と考えられています。

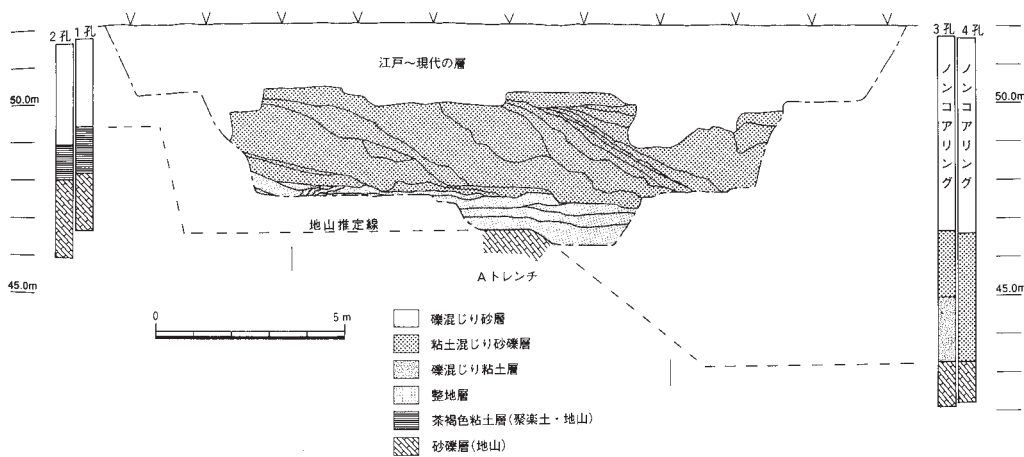
3. 聚楽第の研究

聚楽第は堀や石垣、建物等が残っていないため、その構造についてはよくわかっていません。江戸時代に制作された「洛中洛外地図屏風」「聚楽第絵図」「聚楽第図屏風」「聚楽第行幸図」や聚楽第を模したと伝えられる城郭を基に研究が進められてきました。

近年は、発掘調査の成果をもとに聚楽第の復原がなされています。第2図に示した調査の多くは、埋設管の敷設に伴う立会調査や試掘調査といった小規模なものがほとんどで、聚楽第の遺構を確認したのはわずかな事例に限られます。小面



第2図 聚楽第復原図及び周辺調査地(馬瀬智光案)



第3図 19地点聚楽第本丸東堀内土層図

積の調査では、かなり深いところに埋まっている聚楽第関連の遺構の調査を行うことができないのがその理由の一つです。また、この周辺では近世以降に

じゅらくつち
聚楽土の採掘坑が多数量削されたことや、秀吉により「徹底的に破壊された」ために、遺構がほとんど残っていないこともその要因です。

1 地点では、推定西之丸南堀の幅が 43.5 m であることが確認されています。

19 地点では本丸東堀が確認されました（第3図）。調査地の土層観察とボーリングデータより、地表下 5.4 m、8.4 m で地山を検出したことから、犬走り^{じやま}を設けた二段掘りの堀であることが判明しました。また、水が滞水^{たいすい}していた様相も観察されています。堀は西側から埋められた様相を示しており、埋土中に大量の金箔瓦^{きんぱくがわら}が廃棄されていました。ここで出土した金箔瓦は、重要文化財に指定されています。

29 地点では北之丸^{きたのまる}の石垣が 4 石確認されています。大きさは 0.5 ～ 1 m で、自然石が並んでいました。

小規模な調査を行いますと、現地表面から浅い位置で地山が認められる場合と認められない場合があります。調査地点を地図上にマークしていくと、浅い位置で地山が見つからないのは聚楽第の堀に当たっているためということがわかってきました。このような発掘調査による知見と、聚楽第の絵図、聚楽第を模した城郭の縄張^{なわばり}などを基にして、聚楽第の復原案が複数の研究者によって提示されています。第2図は馬瀬智光氏の復原図です。研究者によって細かな点で異同はありますが、今回の調査地が本丸南堀位置に当たることは一致しています。復原どおりの位置で本丸南堀の石垣を検出したことは、発掘調査の知見をもって聚楽第の復原を行うという研究方法の有効性を示した点で、一つの成果と言えます。

4. 今回の調査で検出した遺構（第4図）

調査地の全面で、江戸時代に聚楽土を採掘した坑^{あな}を多く検出しました。聚楽土はこの近辺で採れる良質の粘土で、壁土^{かべつち}や陶土^{とうど}に用いられました。そのためか、安土桃山時代以前

の遺構は、わずかにしか検出できませんでした。

1) 平安時代 大内裏北東部に位置しますが、平安時代の遺構は検出できませんでした。この時期の遺物が後世の遺構に混入していますので、後世の大規模な地形改変のために平安宮関連の遺構は壊されたと判断されます。

調査トレンチ内では、北半と南半で2 m以上の高低差があり、特に造成層S X 55の北辺に沿って急激な段差を検出しました。この段差の直上に安土桃山時代の造成層S X 55が形成されていますので、段差はそれ以前に形成されたと言えます。このような大規模な土地改変が行われたのは、平安宮もしくは聚楽第の造成のいずれかの時点と推定されます。

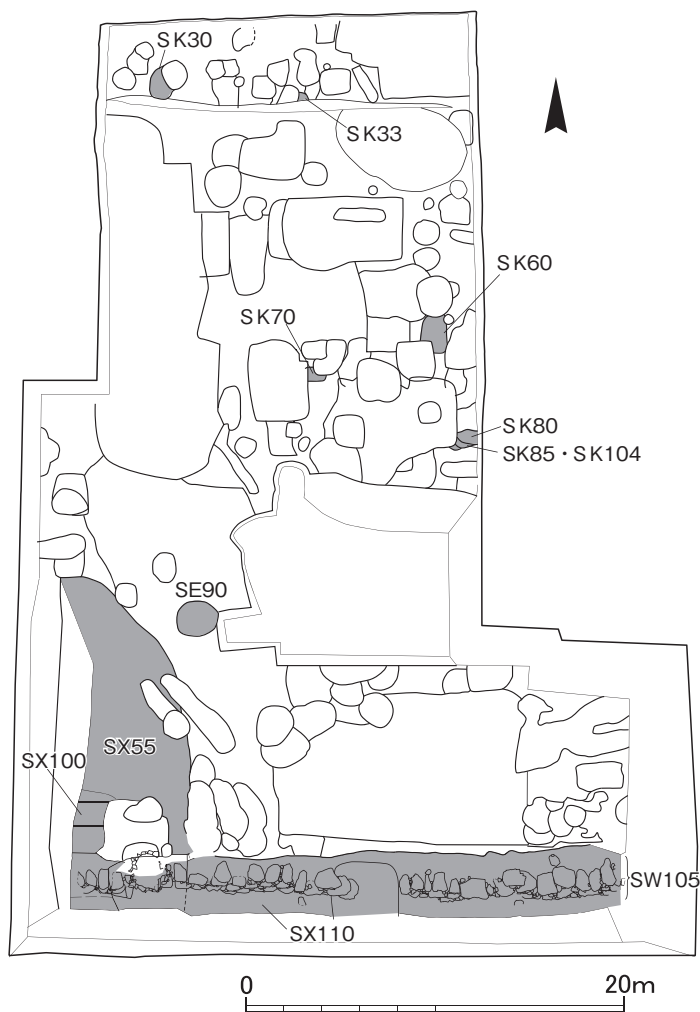
2) 鎌倉～戦国時代

鎌倉～室町時代の遺構には、13世紀後半の土坑S K 33、14世紀代の土坑S K 85、15世紀代の土坑S K 104を検出しました。戦国時代の遺構には、15世紀末から16世紀前半の土坑S K 30・60・70・80、井戸S E 90があります。

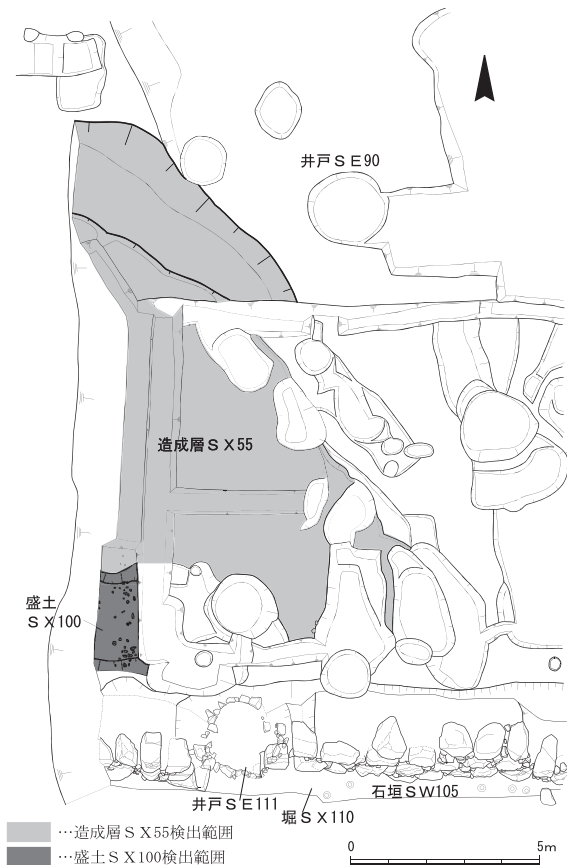
3) 安土桃山時代 造成層S X 55、盛土S X 100、石垣S W 105、本丸南堀S X 110を検出しました。遺構は標高の低いトレンチ南部に集中し、本丸内部にあたるトレンチ北部では全く確認できませんでした。

造成層S X 55 トレンチ南西部で検出した造成土で、南北約10.0 m、東西5.5 m、厚さ最大で1 mを測ります。黄褐色粘土、黄褐色シルト質粘土、黒褐色砂、褐色砂の土層が細かい単位で互層状に突き固められた堅固な土層で、造成層S X 55の北辺に沿って形成された高低差約2 mの段差と下段の平坦面を埋めるように検出しました。造成層S X 55は旧地形の凸凹と約2 mの崖面を解消するために施工された可能性が考えられます。

盛土S X 100 トレンチ南西端付近で検出した堆積層で、トレンチ内での検出範囲は南北約3.6 m、東西約0.9～1.2 mを測ります。造成層S X 55と同様に、粘質、砂質の土層



第4図 検出遺構配置図

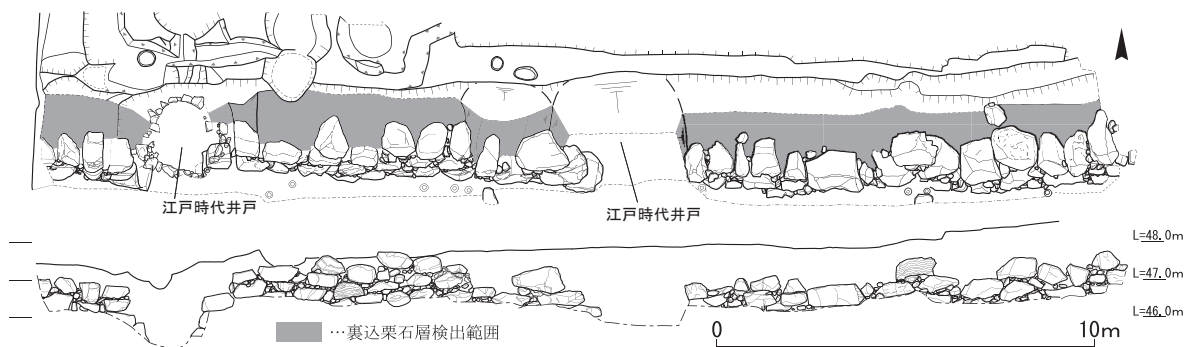


第5図 造成層 S X 55平面図

が細かい単位で互層状に^{たたきし}叩き締められて構成されており、盛土 S X 100 と造成層 S X 55 の下端がほぼ同じ標高であるので、造成層 S X 55 と一連の堆積層と判断できます、しかし、造成層 S X 55 と比べて礫を多く含み、堆積単位も異なるため区別しました。南端部では地山面を掘り込んでいることから、相当な重量に耐え得るために形成された堆積層と考えられます。

石垣 S W 105 検出面は現地表下 3.0 ~ 3.5 m で、東西約 32 m 検出しました。安全を確保するために、東端部は石積みの延長を確認した直後に埋め戻したので、図示できるのは長さ約 30 m 分となります。石垣は最大 4 段の石を確認し、現存高は最大で 1.5 m を確認しました。南側に調査地を広げることができなかったため、これより深く掘削することができず、最下位で検出した石が基底石であるのかどうかは確定できません

でした。しかし、断面観察により基底石と判断できる石を認めましたので、今回検出した石垣最下段の石列は基底石に近いところのものと考えられます。石垣 S W 105 は勾配約 55° で積まれています。石垣の石材は、調査範囲においては西から東へ徐々に大型化していく傾向にあります。最も多いのは幅 0.5 ~ 1.0 m、奥行 1.0 m 前後で、重量 0.4 ~ 0.6 t の範囲に収まりますが、東部の石には幅 1.0 ~ 1.5 m、奥行 1 m 以上、重量が 1.0 t を越えるものが多く含まれ、この時期の城郭としては突出して大型の石を用いています。石材は^{かこうがん}花崗岩がほとんどで、すべて表面が^{ふうか}風化し、丸みを帯びています。山中や河原の^{せきざい}転石（自然石）を使用したと考えられます。また、石材の表面には^{やあな}矢穴や^{こくいん}刻印はなく、一部の石に



第6図 石垣 S W 105平・立面図

はつり痕が見られる以外に明瞭な加工痕跡は確認できませんでした。また、多くの城郭では、石塔や石仏、礎石、古墳の石棺などを石垣に「転用」していますが、今回の石垣にはそういったものは認められませんでした。裏込の栗石には、径5～15cm大の石礫を用いています。

堀S X 110 石垣S W 105に面する聚楽第本丸南堀で、北端部の幅1m程度を検出しました。埋土に金箔瓦を含む石礫が堆積していました。この石礫は、大きさ・形状から、裏込に用いられた栗石と判断されます。また、石垣検出時には、石材の上部を覆うようにこの石礫が堆積していました。これらのことから、石垣の背後に詰められていた栗石が、築石を抜き取った際に堀S X 110内に崩れたと想定されます。

5. 石垣の見方と石垣の評価

城郭に石垣が用いられたのは、16世紀中葉の滋賀県観音寺城が早い事例で、石垣を多用したのは織田信長の安土城が代表的なものとなります。それまでの「土」で「成」った城が、石垣を多用して造られるようになります。

石垣は、石の積み方、石の加工の度合いで分類されます。

石の積み方には、乱積、布積の二種に大きく分かれ、このほか谷積、亀甲積があります。乱積は石を様々方向に積み上げるもので、布積は石の目を横方向に揃えて積みます。

石の加工には、野面、打込接、切込接があります。野面は自然石をそのまま用いるもので、打込接は石の角や面を成形して、石と石の接合面の隙間を減らして積み上げます。切込接は石を方形に加工し、石と石とを密着させて積み上げるものです。

時代が下るにつれて、石材1個1個の加工の度合いが大きくなっていき、乱積から布積へと石の積み方も精緻なものとなっていく傾向にあります。

今回の調査では、秀吉の聚楽第石垣が地中にパックされた状態で出土しました。このことは、後世に手を加えられずに、当時の姿のままに出土したということであり、秀吉の時代の技術を伝える資料と言えます。

今回検出した聚楽第本丸の石垣の特徴として、同時期の石垣と較べて、大きな自然石を用いていること、転用石が用いられていないことが挙げられます。大坂城三之丸では0.3～0.9m程度、伊丹市有岡城では0.5～0.9m、滋賀県八幡山城では一辺0.3～0.4m、0.6～0.8mの自然石が積まれていました。有岡城では多数の転用石が用いられていました。これらは本丸を囲う石垣ではありませんので、これらの城の本丸にはより大きな石を用いていた可能性はあります。そのため、今回の石垣と単純な比較はできませんが、少なくとも聚楽第本丸の石垣はこれらの事例よりも大きな石を用いていたことは間違いありません。

また、石垣の背後の栗石は径5～15cm大の石礫が用いられています。安土城伝羽柴秀吉邸跡では20cm～人頭大の石が、大坂城三之丸では20～40cm大の石礫が栗石に用いられています。聚楽第の石垣は、他の城郭の石垣と較べて粒が揃った小さな栗石を用いています。

こういった特徴から、同時代の石垣と較べて、丁寧に石を選び出して造られていると言えます。この点で、天下人秀吉の權威を全国の大名に誇示するために、贅を尽くして造られたと言えるでしょう。

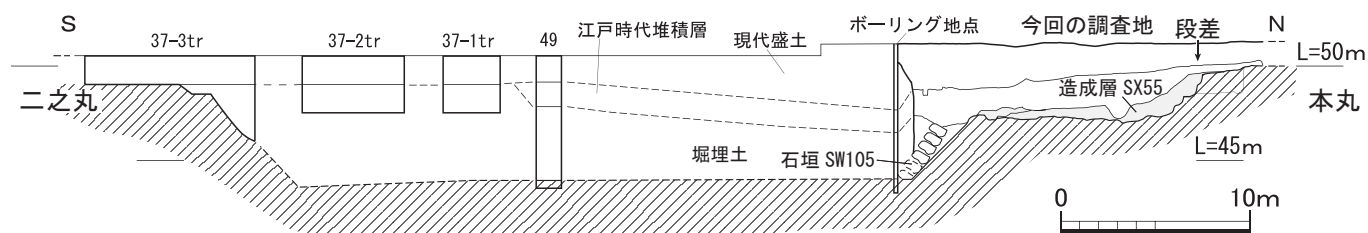
今回検出した石垣S W 105は、聚楽第研究の成果によると、本丸主軸線上のやや西側に位置します（第2図）。石が東へ向かうにつれて大型化することは、今回の調査地の東側に重要な施設が存在したことを示すものかも知れません。入り口付近の石垣に特に大型の石材を選別して秀吉の權威を示したとすると、今回の調査地のすぐ東側に本丸への入り口が存在した可能性があります。

また、石垣の勾配は約55°ですが、大坂城三ノ丸では55～60°の勾配で、秀吉の時代の一般的な勾配と言えます。一般的に、勾配が緩やかで直線的に積まれた石垣から、勾配が急で高く積まれた石垣へと変わっていきます。江戸時代には、石垣の下部は緩やかな勾配で、上部にいくにつれて急勾配となり、最後は垂直となる、「反り」をもつものが造られます。

今回の石垣の石は花崗岩がほとんどで、部分的に砂岩・チャートが使われています。産地は滋賀県栗東市観音寺や比叡山山麓の京都市白川地区が想定されますが、確実なことはわかりません。聚楽第以後、石垣は城郭の造作に普通に用いられるようになっていきます。石垣に適した大きさと形状の自然石を山や川で探し出すには、かなりの労力が必要であったと考えられます。そのため、石垣の需要が増すことにより、石切り場が拓かれ、石切りの技術や運搬の技術が発達するなど、石材の供給体制が整備されていきます。秀吉の聚楽第の石垣はまさにその前段階の石垣と言えます。

6. 石垣の復原

今回の調査地の周辺では、南隣の辰巳児童公園内の10地点、49地点で本丸南堀が確認されています（第2図）。また、智恵光院通をはさんで西に近接する37・41地点では、本丸南堀の南北肩が検出されており、南堀は幅43.5mであることがわかっています。これらの知見を基に堀底（標高44m程度）と当時の地表面を復原すると第7図になります。石垣S W 105は、現状では最大で4段、1.5mの高さを確認できていますが、もしこの下にまだ石垣が残っているとすると、高さは最大で4m程度、全体で10段程度となります。

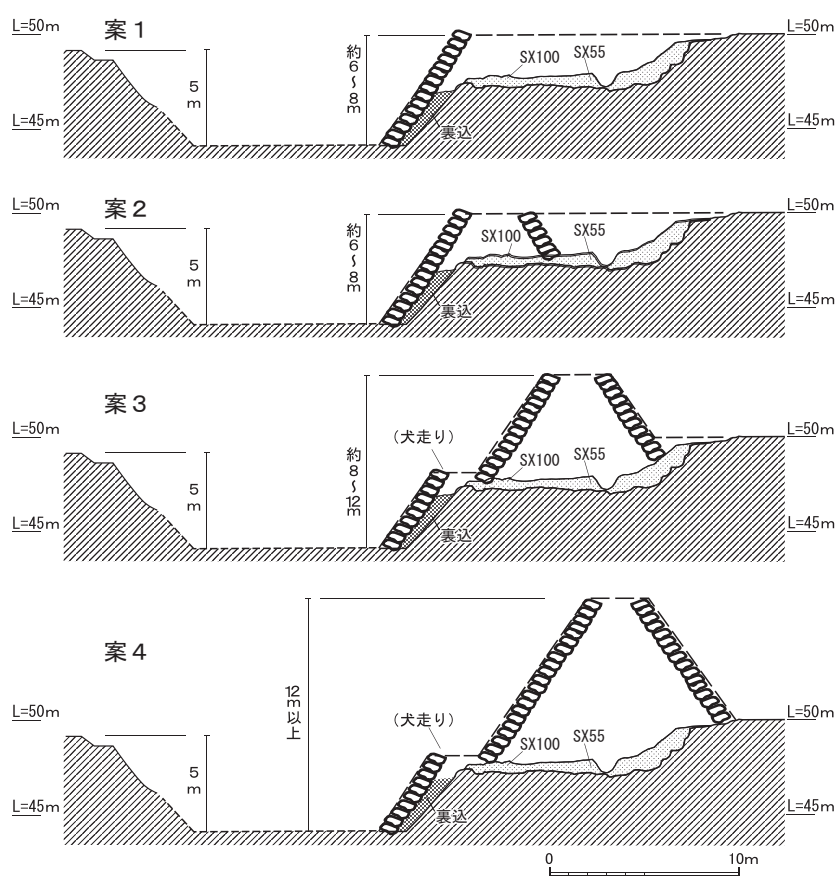


第7図 聚楽第本丸南堀断面模式図

石垣初期の段階では、石垣は一段で高く積まれるのではなく、二～三段に分けて積み重ねられています。聚楽第以前では、^{こまきじょう}小牧城、^{きゅうにじょうじょう}岐阜城、旧二条城で二段の石垣が造られています。秀吉の大坂城では三段に造られています。聚楽第の東堀では犬走りが確認されており、二段に堀が掘られていました（第3図）。秀吉の頃の石垣は、積み上げる勾配も浅く技術的に高く積み重ねなかったためか、段を設けて複数の石垣を造ることで、全体として高い石垣を構築していました。

大坂城の石垣では一段の高さが10m程度であるので、10m程度の高さが一度に積み上げることができる技術的な限度であると想定し、聚楽第本丸東堀が二段であることも考慮し、本丸南堀の石垣の高さと構造を検討しましょう。

石垣は第8図に示したように、案1・2は段差が形成されている標高50mの平坦面（調査地北半の平坦地）の高さまで、一段の石垣が積み上げられているものです。案1は造成層SX55全体が石垣本体に取り込まれているものです。案2は造成層SX55の中央部分に石垣北側の石積みがなされるもので、崖面と石垣の間に若干の空間が設けられるものです。しかしこれら案1・2では、石垣頂部の標高が南二之丸の地盤高とほぼ同じ高さとなります。すなわち、南二之丸から本丸内部を見渡せ、



第8図 石垣復原案

場合によっては見下ろすこととなります。関白の職に就いた秀吉の威信を示すという点で、やや説得力がないものと言わざるを得ません。

案3・4は二段に石垣が造られ、全体として標高50m以上の高さにまで石垣が構築される案です。案3は、造成層SX55の盛土中に土塁が構築されており、案4は造成層SX55すべてが土塁の中に位置するものです。案3では、堀底から石垣の頂部までの高さは8～12mとなり、本丸内の平坦面からは数mの高低差があります。案4では、石垣が一層高くなり、堀底から頂部までの高低差は12m以上となり、本丸内平坦面から6m以上の高低差となります。また、石垣SW105の北に堆積する盛土SX100は多量の礫を含む堅固な層で、石垣SW105から約2m北に位置します。図では、この地点に二段目石垣の基底を想定していますが、犬走りの平坦面であった可能性もあります。

聚楽第の描かれた^え絵図を見ると、石垣はそれぞれの郭の^{くるわ}周囲を高く囲むように描かれています。これらの絵図がどれだけ事実を反映しているのかは不明ですが、案3・4のいずれかであった可能性が高いと思います。

7. まとめ

今回の調査で、初めて本丸南辺石垣を検出し、地点によっては聚楽第の遺構が地中深くに遺存していることが判明しました。今後の聚楽第研究の定点として、今回の調査成果は位置づけられるでしょう。

石垣については先にまとめました。秀吉が大坂城、聚楽第を築造して以後、各地の城郭に石垣が多用されるようになります。今回検出した聚楽第の石垣は、日本における発展期の石垣として重要であると言えます。

また、聚楽第は徹底的に破却されたと文献に記されていますが、その実態は不明でした。今回検出した石垣は、復原案の案3ではほぼ2/3、案4では3/4の石が抜かれて、破壊されているものと推定できます。今回の発掘調査で確認できたように、堀内は部分的に埋められていますので、石垣は実際には目に触れない状態であったと言えます。石垣が部分的に残るとは言え、破却の実態は文献の伝える通りの大規模なものであることが明らかとなったと言えます。

なお、今回報告した聚楽第の石垣は、京都府警察本部をはじめ、関係各位のご尽力により建築計画を一部変更して、現地の地中に保存されることとなりました。

じゅらくだい 聚楽第にみる秀吉の城造りと町造り

同志社大学文化情報学部

教授 鋤柄俊夫

はじめに—一本丸石垣発見から生まれる新たな3つの研究—

聚楽第の濠・内部、秀吉時代の都市

1. 聚楽第の濠の位置

(1) 西田直二郎さん (1919「聚楽第址」)

松林寺境内の窪地・土屋町通低地

(2) 櫻井成廣さん (1936「聚楽第と伏見城」『軍事史研究』、1971『豊臣秀吉の居城』)

毛利輝元は小田原役中に聚楽の留守を守る。広島城は聚楽第を写した『吉田物語』

(3) 内藤昌さん (1971「聚楽第—武家地の建築」)

「洛中絵図」の地名に基づき、「兼見日記」「駒井日記」の記述から郭くわの存在と場所を推定。

天正17年から19年にわたる毛利家の広島城ひろしまじょうの築造にあたり「以聚楽御城図縄張也」(江系譜)も参考。

(4) 足利健亮さん (1984『中近世都市の歴史地理』) ★広い視野に注意が必要

(5) 湯口誠一さん (1988「町名の軌跡—聚楽第跡と上京の替地—」『古地図研究』)

「京都図屏風」(洛中洛外地図屏風)に基づいて現地を推定。

(6) 中井均さん (1990「聚楽第」『豊臣秀吉事典』)

清洲城きよすじょう・広島城たかおかしょう・高岡城つじょう・津城ながおかしょう・長岡城しんじょうじょうなどとの共通性に注目

(7) 聚楽第跡の発掘調査

裏門一条下で本丸北濠の南肩口・下長者智恵光院東で本丸南濠・中立売大宮で東濠・分銅町で濠・一条大宮で鉄砲矢倉状てっぽうやぐらの施設・智恵光院中立売で金箔瓦きんぱくがわらと黄褐釉耳付茶壺おうかつゆうみつきちやつぼなど (馬瀬 2010)。

1988 馬瀬智光さん・1998 森島康雄さん・2001 百瀬正恒さん

2. 聚楽第の内部の様子

(1) 『聚楽第図屏風』(三井記念美術館)

天正15年9月～16年4月の風景

(2) 『聚楽第行幸図屏風』(堺市博物館)

慶長年間末年?

(3) 『洛中洛外図屏風』(尼崎市教育委員会)

(4) 『御所参内・聚楽第行幸図屏風』(上越市・個人蔵) 慶長年間?

★注目すべき石垣描写→絵解きの展開

①辻惟雄さん(1965「聚楽第図屏風について」『國華』)

②内藤昌さん(1971)

③井溪明さん(1988「聚楽第行幸図について」『堺市博物館館報』)

④伏谷優子さん(2005「聚楽第と聚楽第行幸が描かれた洛中洛外図について」『文化史学の挑戦』)

⑤狩野博幸さん(2010『秀吉の御所参内・聚楽第行幸図屏風』)

3. 秀吉の時代の都市

(1) 秀吉の京都改造

天正19年!この年は、織田信長によって着手せられた天下統一の事業が、その継承者豊臣秀吉の手によって完成せられた年であると同時に、帝都京都にとっても、都市としての発展に、一つの大きな時代を画した時である(小野晃嗣1940)。

①天正18年(1590)から始まる^{まちわり}町割の整理、寺町・高倉間、堀川以西・押小路以南の地域に、半町ごとに南北の道路をつけた^{たんざくがた}短冊形の^{ななくち}新地割。

②市中散在の寺院を東の京極と安居院付近に集め、寺町、寺ノ内。

③天正19年に計画された総延長5里26町に及ぶ^{おどい}御土居。内外の交通は七口を主要、初めての^{らじょう}羅城、聚楽第を中心とした京都の城下町化(日本歴史地名大系)。

(2) 京都秀吉年譜

天正11年(1583) 8月:大坂城築造開始。9月:^{みょうけんじじょう}妙顕寺城造営

天正12年(1584) 4月:^{こまき}小牧・^{ながくて}長久手の戦。11月:織田信雄・徳川家康と和を講じる。

天正13年(1585) 7月:^{かんぱく}関白就任藤原姓。8月:四国平定

天正14年(1586) 2月:築造開始。4月:大仏殿創建を諸国に指示。

12月:^{だじょうだいじん}太政大臣豊臣姓、11月:正親町天皇讓位、後陽成天皇受禪。

天正15年(1587) 正月頃:作庭、3月:島津氏討伐のため大坂を出発。7月:凱旋。

- 9月：大坂より新第に移る。10月：北野大茶湯。^{きたのだいさのえ}
- 天正16年（1588）4月：後陽成天皇行幸。『聚楽第行幸記』。5月：方広寺大仏殿の居礎の儀。^{きよそぎ}後藤徳乗、^{てんしょうおおばん}天正大判。
- 天正17年（1589）5月20日：^{ていしんしよしょう}廷臣諸將に金2000枚、銀25000枚を分配、金銀を南門内二町に積み敷く。27日：淀城で鶴松生まれる。9月：御所修造。11月：^{らくちゅうけんち}洛中検地。
- 天正18年（1590）1月：増田長盛三条大橋。7月：^{おだわらじょう}小田原城に入る。9月：聚楽第で茶会。11月：^{ちょうせんしせつ}朝鮮使節を聚楽第で引見。12月：^{なごやじょう}名護屋城出陣準備。^{らくちゅうまちわり}洛中町割。
- 天正19年（1591）閏1月：^{ほんがんじ}本願寺に六条堀川を与える。御土居造営。^{おどい}2月：^{せんりのきゅう}千利休追放。10月：名護屋城築城。12月：鶴松の夭折により甥秀次に関白を譲り秀次が聚楽第に入る。
- 文禄元年（1592）1月：後陽成天皇行幸。4月：^{ぶんろく}文禄の役。8月：^{ふしみしげつじょう}伏見指月城造営。
- 文禄2年（1593）8月：大坂城で秀頼生まれる。9月：方広寺大仏殿上棟。^{じょうとう}
- 文禄3年（1594）2月：吉野の花見。3月：伏見指月新城城着工。8月：伏見指月新城竣工、秀吉移る。12月：秀頼が指月新城に移る。
- 文禄4年（1595）7月：秀次事件、聚楽第破却命令「一字も残さず、基礎にいたるまで悉く毀たしめ」『日本西教史』、「聚楽城ならびに諸侍之家門伏見へ引き移せらる」『當代記』。
- 慶長2年（1597）4月：内裏の東に屋敷を造営。9月：内裏の東の屋敷に秀頼が移る。
- 慶長3年（1598）3月：^{だいご}醍醐の花見。
- 慶長5年（1600）「聚楽屋敷に能見物」『神龍院梵舜記』。
- 慶長15年（1610）「金春大夫、聚洛古城おいて勸進あり」『神龍院梵舜記』。

(3) 秀吉にとっての京と大坂

- ①本願寺移転
- ②御所修造
- ③方広寺造営→伏見道と大仏橋
- ④伏見指月城造営→伏見との関わり

★大坂（内田九州男 1989「豊臣秀吉の大坂建設」）

秀吉の構想は①大坂城②大名屋敷③内裏④五山など主要な寺院⑤セミナリヨ⑥市（イエズス会）

天王寺・住吉・堺津へ三里余り、皆、町・店屋・辻小路を立て続け、大坂の山下となるなり。（柴田退治記）→堺との関わり

★首都大坂と外港堺

寺町の建設・中島（天満）の開発

天正 11 年 9 月、平野郷住民移住（平野町）、東西 20 間・南北 60 間の南北に長い町割り。東西外側に寺町計画。

文禄 3 年（1594）惣構工事→城下完成

★慶長伏見大地震

慶長元年（1596）閏 7 月 13 日（9 月 5 日午前零時）山城・摂津・和泉など。特に京都の三条から伏見に至るまで被害甚大。東寺は南大門ほか倒壊。東福寺・清水寺・天龍寺・二尊院・大覚寺・本願寺・方広寺（大仏の胸から下が損傷）・向島城は墳砂被害があった。伏見城の天守閣が倒壊「伏見の事、御城：御門殿以下大破」（義演准后日記）（地震加藤）。

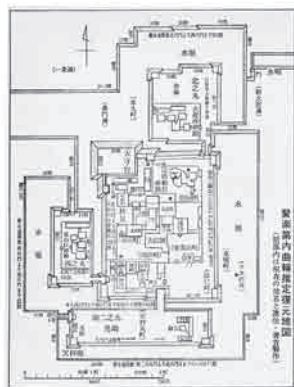
「大坂堺も同前」（当代記）。「大坂には御城不苦了、町屋共大略崩了」「和泉堺事外相損」大坂城は軽微、山下と堺では町屋大半が倒壊（言経卿記）。

★三の丸工事

慶長 3 年（1598）春、①新城壁の建設②大名屋敷の伏見から大坂への移転③新市街地の造成と 7 万軒の移転④濠の開削。「大坂町中屋敷替」→船場
→堺の復興が困難なための新しい港

おわりにー慶長伏見大地震ー

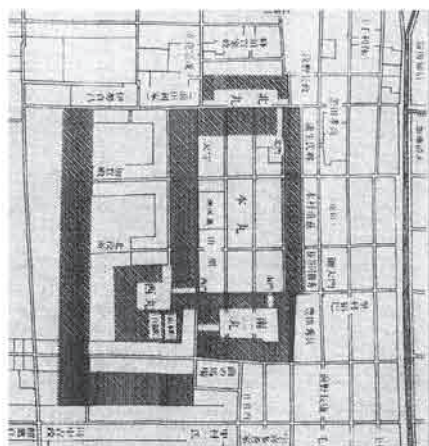
1. 慶長伏見大地震の前後で大きな変化
2. 秀吉の世界観は慶長伏見大地震以前
3. 「大坂」と「堺」に対応する「京」と「伏見」
「館」と「湊（市）」の集大成



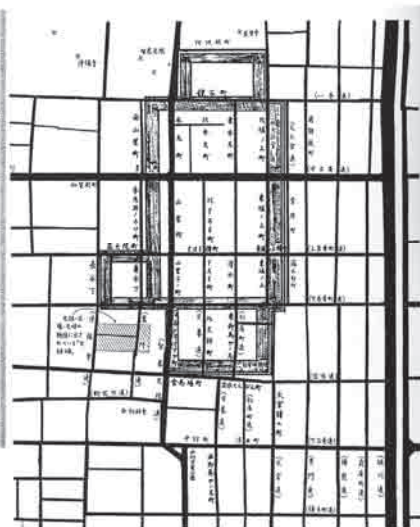
櫻井成廣 1979



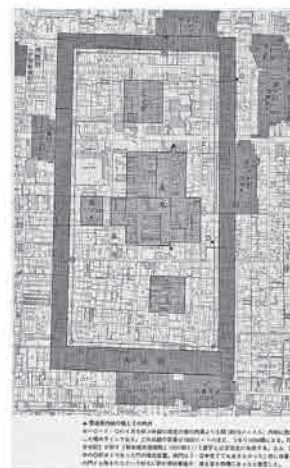
櫻井成廣 1971



内藤昌・大野耕嗣・中村利則 1971



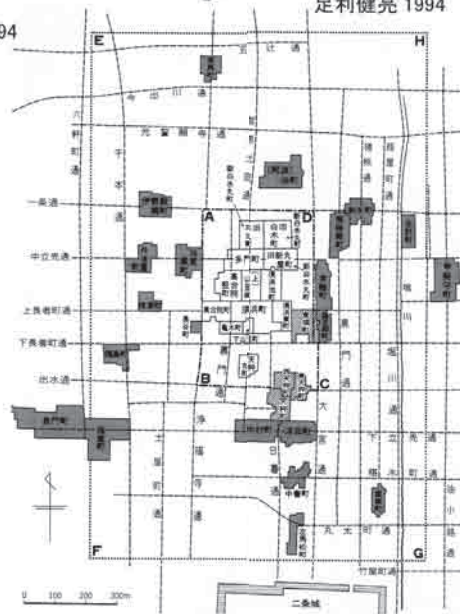
湯口誠一 1994



足利健亮 1994



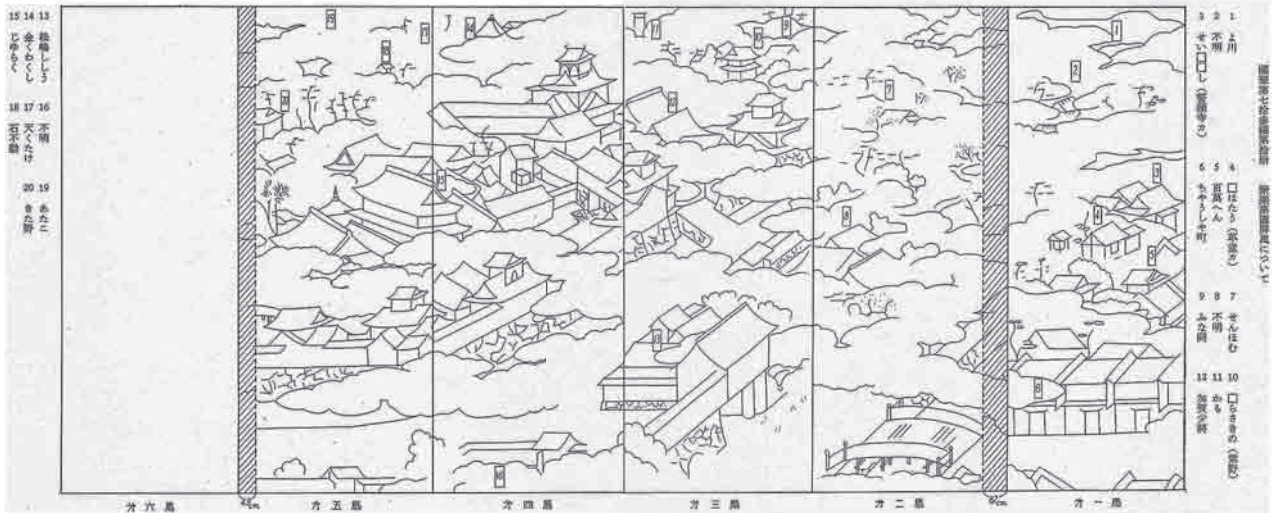
櫻井成廣 1971



第04図 聚楽第 (A—B—C—D) 考定作業図

足利健亮 1984

第1図 濠の位置



辻1965

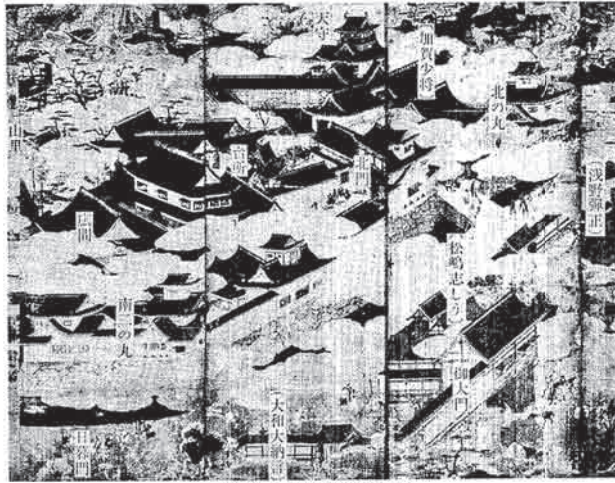
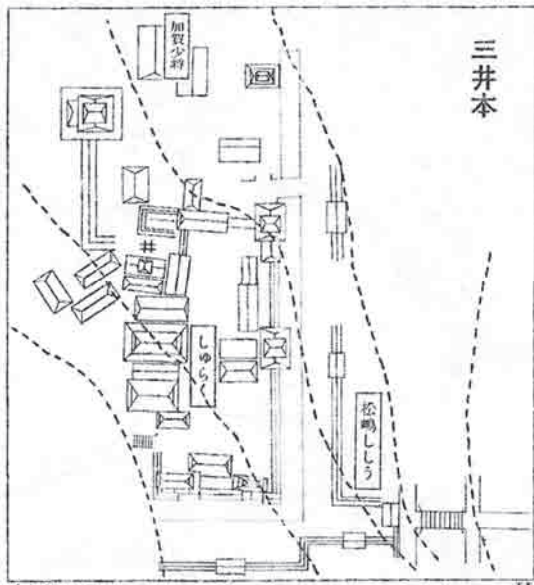


図 1-1-8 三井家蔵本聚楽第図の物件名

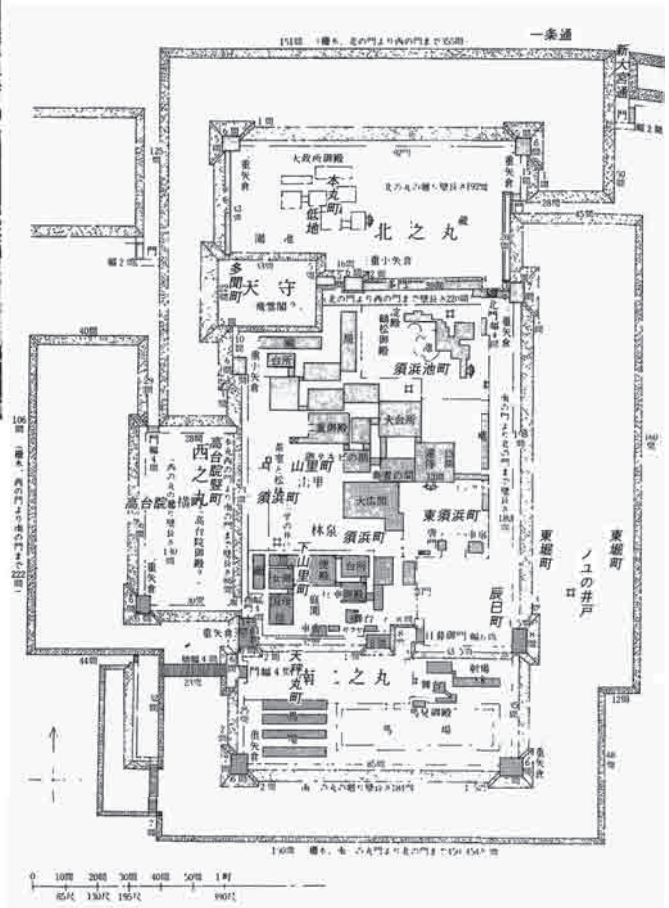
□ : 付箋判読名 ◻ : 付箋があっても判読不能にて推定したもの ◻ : 推定

内藤1971



(点線は屏風の各おせ部)

井溪1988



口絵第17図 聚楽第内曲輪推定復元地図

(著者製・ゴシック斜体文字は後世の地名)

桜井1971

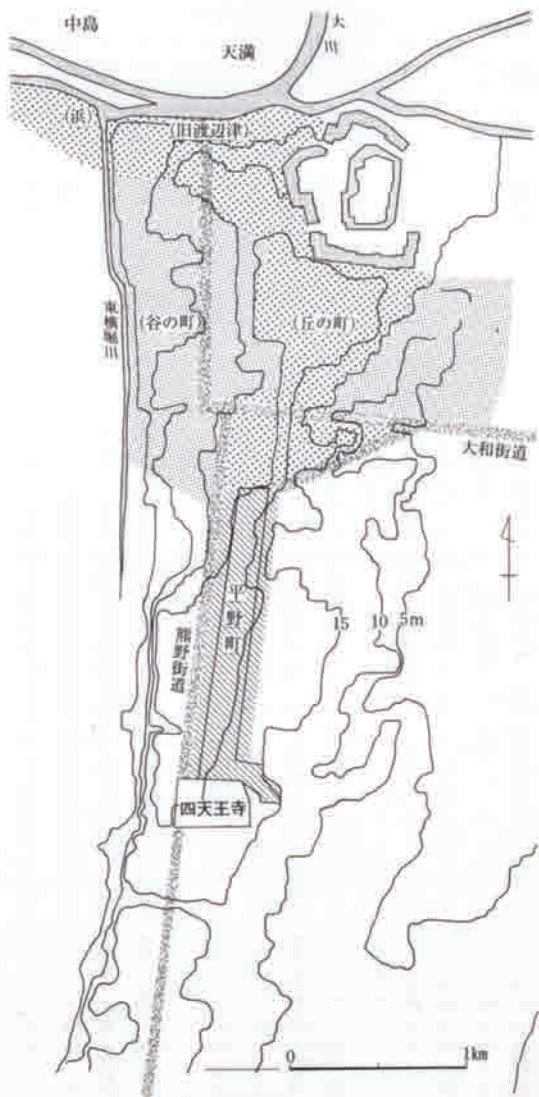
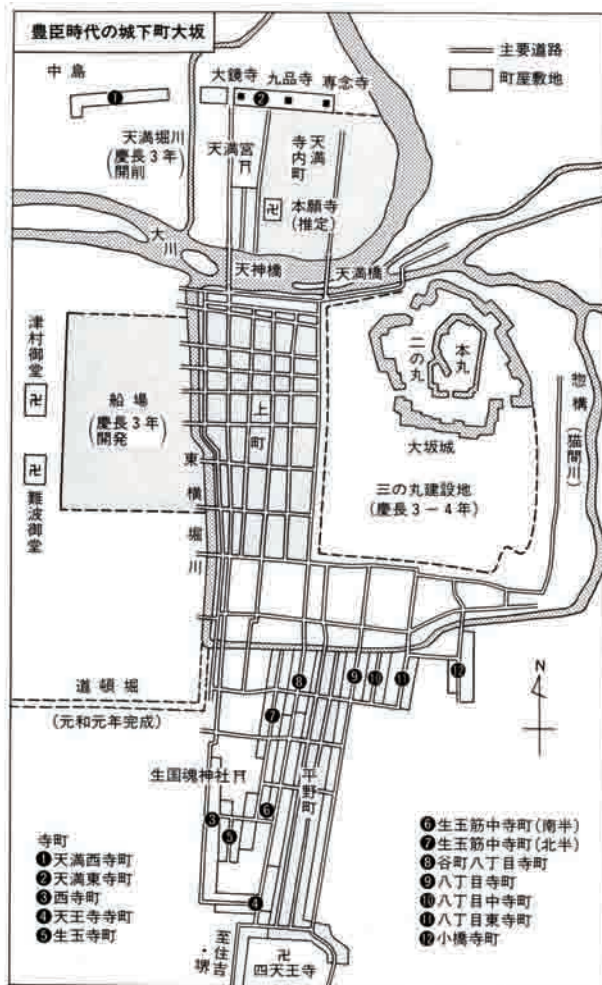
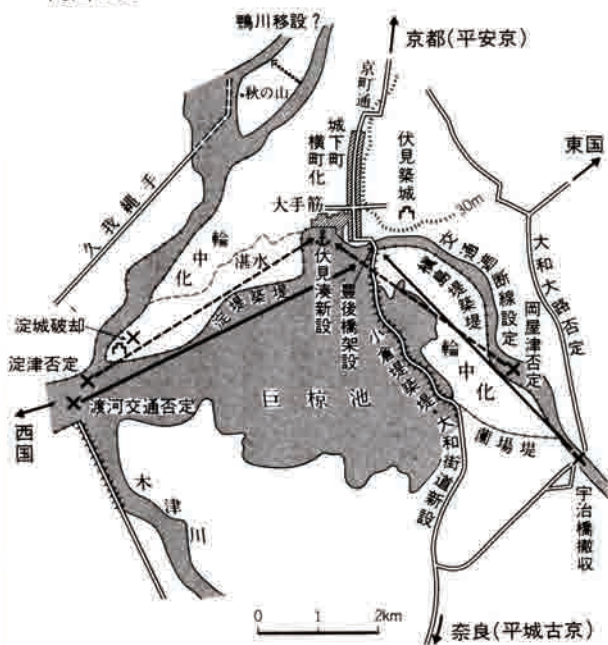


図10 豊臣前期における大坂城下の復原モデル（地形と大坂城は現在のもの）



内田1989

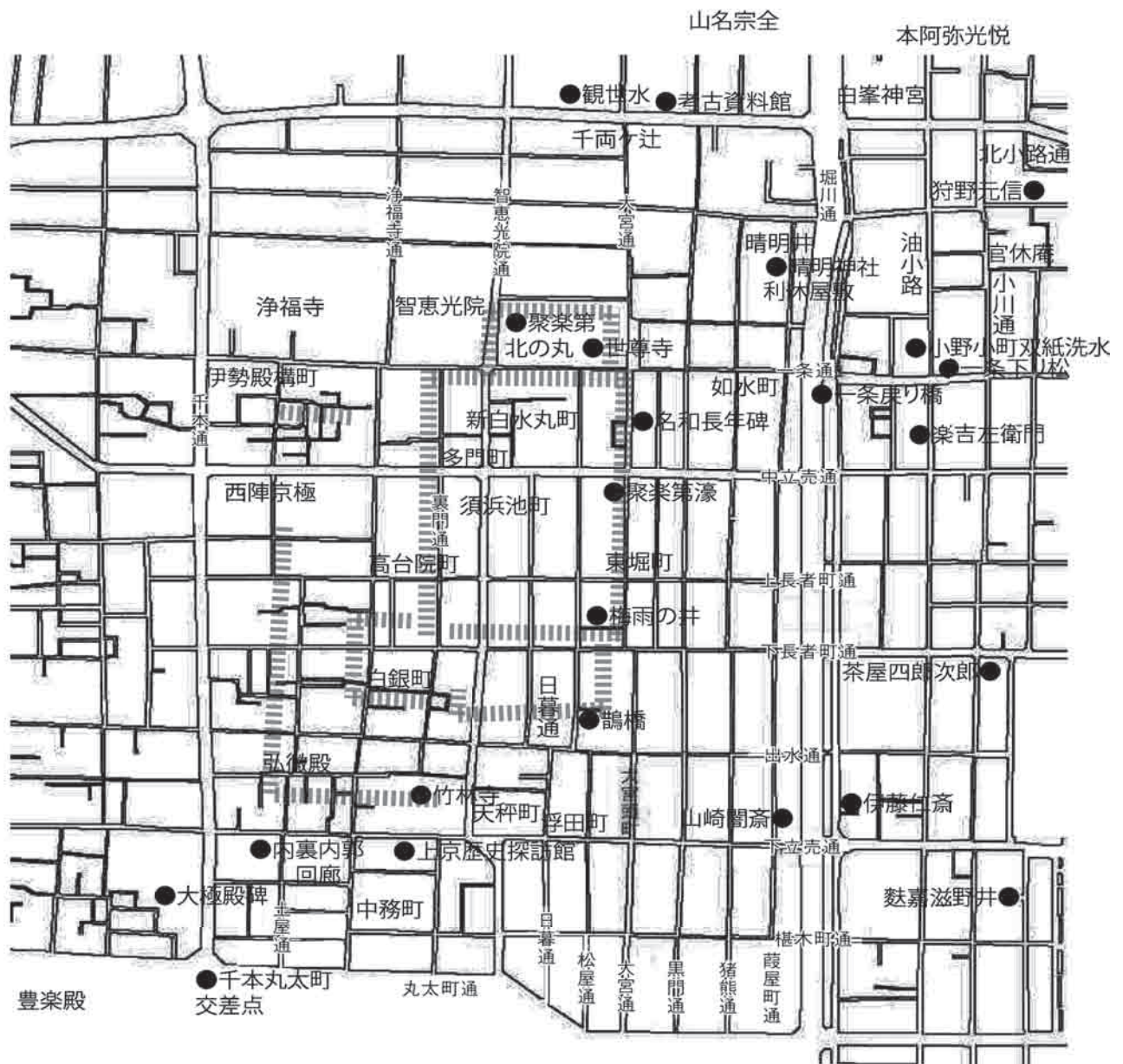
足利1984



第47図 秀吉の伏見経営構想



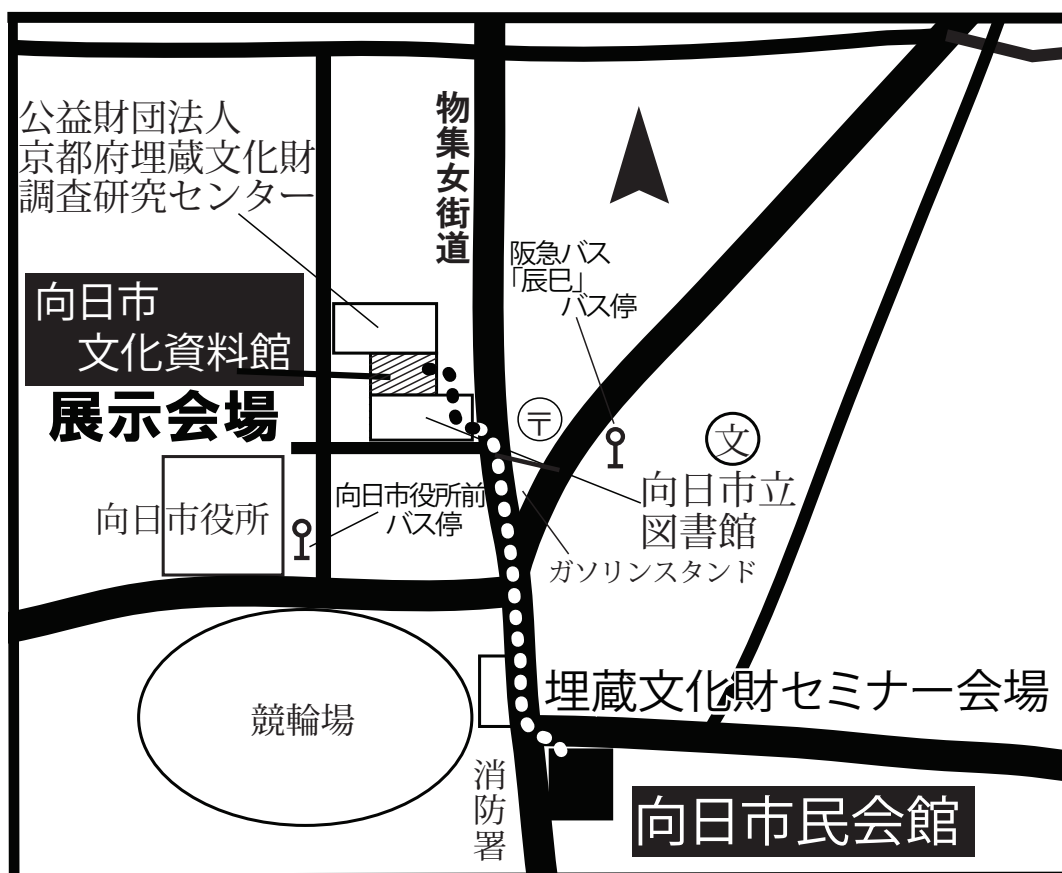
第3図 大坂城と伏見



滋野井: 平安初期の儒者滋野貞主の邸宅で「明月記」建永元年(1206)に「御幸滋井泉了」とある泉が付近にあった「京町鑑」。
 伊藤仁斎: 江戸前期の儒者。上層町人で角倉・本阿弥・尾形家は親類。古義堂を開く。
 山崎闇斎: 江戸前期の儒者。京都の鍼医の子。還俗して京都で開塾。晩年に垂加神道を創始。
 茶屋四郎次郎: 家康の貿易を担い貿易管理にあたった。自らも朱印船貿易を。
 名和長年: 隠岐に流された後醍醐天皇を迎えて船上に立て籠り幕府軍と戦う。
 世尊寺: 藤原行成が長保3年(1001)に伝領した邸宅桃園を寺院に改めた。
 一条下り松: 宮本武蔵との決闘で名高い吉岡の道場があった。
 小野小町双紙洗水: 謡曲「草(双)紙洗小町」で小町が草子を洗ったと伝える。清和水や更級水。
 狩野元信: 室町後期の絵師。狩野派の基礎を確立。
 本阿弥光悦: 安土桃山・江戸前期の芸術家。楽茶碗の陶芸をたしなみ絵画・茶の湯・作庭も。洛北鷹ヶ峰に芸術村。
 観世水: 観世流の紋様である水巻模様はこの井戸の波紋。
 智恵光院: 永仁2年(1294)鷹司家始祖兼平が法勝寺北に創建。
 浄福寺: 寛平8年(896)中宮班子(宇多天皇母)が建立。

第4図 聚楽第マップ

西暦	和暦	京都	備考	伏見	大坂	その他	備考
1582	天正 10	聚楽第	その他 7月本願寺を城に。至寺城。10月大徳寺で信長葬儀		大坂城	その他	6月本能寺の変。清洲会議
1583	天正 11		9月妙顕寺城「堀と天守」。妙顕寺移転。		9月本丸築造	9月平野郷が天王寺に移住。寺町創成。	4月賤ヶ岳会戦
1584	天正 12		5月佐久間道徳の謀反		8月新亭に移る。		4月小牧・長久手の戦い。11月織田信雄・徳川家康と和を講じる
1585	天正 13		3月仙洞御所造営。大徳寺大茶会		4月貝塚本願寺の使者に天守閣を見せる。本丸完成。	4月天満の地を本願寺に与え移す。	7月関白就任藤原姓。五奉行。8月四国平定
1586	天正 14	2月築造開始。3月下旬：深さ3間、幅20間の堀	4月大仏殿創建を諸国に指示。		2月二の丸築造	11月堺の藩を埋め秀吉の支配	12月太政大臣豊臣氏。11月正親町天皇讓位、後陽成天皇受禪。
1587	天正 15	正月作庭。2月竣工。9月大坂より新築に移る。	10月北野大茶湯。寺町移転？		淀城修築		3月高津氏討伐のため大坂を出発。7月凱旋。キリシタン禁令。後藤徳乗、天正大判。
1588	天正 16	4月後陽成天皇行幸	5月方広寺大仏殿の居礎の儀。		二の丸完成		7月刀狩り。洛中・洛外検地
1589	天正 17	5月20日廷臣諸將に金2000枚、銀25000枚を分配	3月御所修造開始。11月：洛中検地。増田長盛が五条大橋造営。	5月淀城で鶴松生まれる。			7月小田原城に入る。12月：名護屋城出陣準備。
1590	天正 18	9月聚楽第で茶会。11月朝鮮使節を聚楽第で引見。	1月増田長盛三条大橋。洛中町割。				1月軍船建造を命じる。関1月パリニヤーノ謁見してイント副王の書をわたす。2月利休追放。9月ルソン総督に服属を勧告。10月名護屋城築城
1591	天正 19	12月甥秀次に関白を譲り秀次が聚楽第に入る。	関1月本願寺に六条堀川を与える。御土居造営。京中屋敷着。2月：利休追放。3月御所修造完了。5月方広寺立柱。8月鶴松天折。寺町完成(浄土宗と時宗が多い)				1月朝鮮出陣命令。3月文祿の役。7月大政所
1592	文祿 元	1月後陽成天皇行幸。	9月方広寺大仏殿上棟。				4月明と講話交渉
1593	文祿 2	8月新御殿(鹿苑日録)		8月：伏見指月新城(隠居城)造営。 関9月移徙	8月大坂城で秀頼生まれ		
1594	文祿 3	8月北方新御殿	大仏橋成立？(方広寺参詣・伏見路)	1月新伏見指月城着工。3月淀城破却天守移築。8月：新伏見指月城竣工、秀吉移る。10月前田利家宇治川堤防築く。12月：秀頼が新伏見指月城に移る。向島城(御遊所)	1月大坂城を秀頼に与える。3月大坂城で能を興行。忍構築造開始、東横堀川を掘る。		
1595	文祿 4	7月秀次事件。8月には聚楽第を破却して伏見へ(桃本朝通鑑)		4月新伏見指月城着工。8月洪水で向島城倒壊。9月新伏見指月城用材徴発			
1596	慶長 元	関7月13日大地震	2月方広寺楼門立柱。関7月13日大地震で家康の聚楽御屋敷大破	1月毛利淀川に太閤塚。2月向島城再築。6月明冊封副使謁見。関7月13日大地震	関7月13日大地震。9月明使を大坂城で引見。	関7月13日大地震	関7月13日大地震
1597	慶長 2		4月内裏の南裏に屋敷を造営。7月善光寺如来を方広寺に移す。9月内裏の東の屋敷に秀頼が移る。	1月伏見木幡城増築開始。5月伏見木幡城天守閣完成。秀頼と移る。	ルソン総督の施設を引見		6月慶長の役始まる。7月フィリピン総督使節謁見。
1598	慶長 3		8月善光寺如来を戻す。	3月醍醐の花見。8月秀吉没す。	春三の丸築造。船場(大坂町中屋敷)・大名屋敷の伏見からの移転		11月島津義弘らが巨濟島から対馬に向かい撤退完了
1600	慶長 5	4月5日聚楽屋敷に能見物(舜日記)					
1610	慶長 15	3月19日金春大夫、聚楽古城において勸進。5月聚楽御城の跡から石をひく(本願寺)					



展示会場へのご案内



関西考古学の日関連事業

— 秋の考古学講座 —

講座3 10月19日(土)「考古学でみる淀川流域の治水」

当調査研究センター 中川和哉 係長

講座4 11月30日(土)「黄泉の国への葬送儀礼—古事記と考古学—」

当調査研究センター 岩松保 係長

対象：一般 定員 30名。往復はがきで申し込み。先着順。

いずれも参加費無料

時間は10:00～11:30。

会場は当調査研究センター研修室

(〒619-0002 向日市寺戸町南垣内 40番の3)



**KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER**

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などのお知らせは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189